巻/頭/言

“21世紀のミッション”と“企業の役割”

The 21st Century's Mission and the Role of Business

末吉竹二郎
Takejiro Sueyoshi

世紀が入れ替わって早10年。21世紀に背負うべきミッションがあるとすれば一体どんな歴史的使命なのだろうか。そして，そのミッションの遂行のために企業が果たすべき役割とは何だろうか。少し考えてみたい。

21世紀のミッションを考える上で重要なのが20世紀の評価である。確かに20世紀は多くの人々を便利で豊かな生活へと誘った。史上最高のモノの豊かさの中で寿命は延び世界人口はついに70億人の大台に乗った。この“功”は素晴らしい。

一方，その陰で前代未聞の地球規模の問題を引き起こしたのも同じ20世紀である。気候変動，水の危機，食糧問題，自然資源の枯渇，生物多様性の劣化，さらには，貧困の拡大，などなど。この“罪”はとてつもなく大きい。

功罪相半ばするが，こと地球問題に関しては悪貨が良貨を駆逐し始めた。このままでは経済の土台であり，すべての生き物の住処(すみか)である地球環境が崩壊しかねない。

そんな危機感を持って振り返ってみると，20世紀の経済はどこか間違っていた。経済が大きくなればなるほど豊かになれると皆が信じ込み，地球環境やエコロジーへの配慮に欠けていた。ひたすら成長を追い求める中で，気が付けば足元の土台が壊れ始めていたのである。人々が反省と批判を込めて20世紀の経済を“ブラウン経済”(ブラウンは環境無視など負のイメージ)と呼ぶゆえんである。

こんな風に見てみると，21世紀のミッションは何と言ってもブラウン経済からの脱却が第一である。と同時に，地球の能力の限界の中でも十分やっていける持続可能な社会を目指す“グリーン経済”の創出，これが第二である。この“ブラウン経済からグリーン経済への転換”こそが21世紀の歴史的使命であると考えたい。

言うまでもなく，ブラウン経済からグリーン経済への転換にあっては，かつての重厚長大型，エネルギー／資源多消費型から，省エネルギー・新エネルギー・省資源・循環型・高度技術などなどのいわゆるグリーン産業への転換が不可欠である。

だが，それ以上に大事なことがある。それは経済の中における企業の役割の再点検である。なぜならば，この豊かさをもたらしたのも，地球問題を引き起こしたのも同じブラウン経済であり，企業はそのブラウン経済のメインプレイヤーとしてその在り方に深くかかわっていたからである。

あえて言おう。20世紀の企業経営は“我が社だけの利益の極大化”にのめり込み過ぎ，外部不経済に全く関心を持たなかった。自社の製品やサービスのもたらすベネフィットの向上には熱心だが，それが生み出す社会コストの増加，なかんずく，環境や地域などへの追加的負荷には見向きもしなかった。それは短期利益主義，排他的ビジネスモデル，環境破壊型の企業経営の典型であった。その結果がブラウン経済である。

これに対して，グリーン経済を支える企業経営は，長期利益主義，包括的ビジネスモデル，環境保全型でなければならない。そのためにはCEOの頭の中の転換が不可欠となる。21世紀は財務業績だけではダメ。環境配慮(E)，社会的責任(S)，ガバナンス(G)(これらを総称してESG問題という)といった非財務的要素をメインストリーム化し，その成果である“社会業績”をも追求すべきだ。そう，これからの企業経営は財務業績と社会業績の二兎を追う“ESG経営”なのである。

折しも2012年はリオサミットから満20年を迎え，世界では地球を守るための議論が熱を帯びて行く。加えて“衡平，公正，正義，格差是正”を求める社会の声は高まるばかりだ。

こうした状況下，21世紀社会が技術に高い可能性を秘める企業に望むのは“問題の解決”であり，より顔の見えるオープンな形での社会への関与ではないだろうか。自社の技術を誇示し守るだけの20世紀的な姿勢を抜け出し，たとえ，未完の技術であってもその目指す先を語りかけるなど，社会との対話を広げ問題解決への参加姿勢を明確にし，社会の審判を仰ぎながら進むスタイルが重要となるだろう。三菱電機グループの“環境行動レポート2011”を紐(ひも)解くと，“グローバル環境先進企業”たらんとする意気込みが随所に感じられ，“問題の一部”には決してならないとの決意が表明されている。グリーン経済を構築する21世紀型のプレーヤーとして立ち現れ，真の実りを社会にもたらし続ける存在となることを期待したい。

◆国連環境計画・金融イニシアテイブ 特別顧問　Special Advisor to UNEP Finance Initiative